

## 第1班

# 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』

## 編纂共同研究

### (1) 共同研究員名

研究班代表：ジョン・ポチャラリ

共同研究者：クリスチャン・ラットクリフ 鈴木陽一

研究協力者：何彬 君康道 徐東千 中井真木 李利

### (2) 研究目的

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻のうち、21世紀COEプログラムにおいてVol.1/Vol.2を、センター第一期共同研究においてVol.3を刊行した。本研究の目的は、完訳版全5巻を刊行することである。これをとおして、海外において、歴史・民俗学・人類学・文学など、様々な分野の方々が日本の「常民生活」のあり様を参考にしてくれることを期待している。

### (3) 活動経過

#### ○目的達成のための方法

21世紀COEの研究成果を継承・発展させることを目的とした本センターの第二期（2011-2013年度）事業の共同研究の再編にあたり、〈図像〉資料研究として、本『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』に加えて、新たに『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編、『ヨーロッパ近代生活絵引』を設置した。前者は、21世紀COEで取り組んだ『日本近世生活絵引』北海道編、同北陸編、同東海道編を引き継ぎ、当初は南西諸島編として構想され、後者は、『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編として刊行してきた外国地域版絵引編纂事業の方法論をヨーロッパ地域に応用するものとして構想されたものである。そして、〈図像〉資料研究は、本センター共同研究の基幹的位置づけにあるとの観点から、この3つの絵引編纂協同研究を「生活絵引編纂共同研究」として統合し、全体の統括にセンター長（田上繁）が当たることとなった。

研究班は、21世紀COEから本センターの第一期事業を牽引してきた福田アジオの退任にともない、第二期以後は、ジョン・ポチャラリ、クリスチャン・ラットクリフを研究員とし、君康道、何彬、中井真木、李利、徐東千の各氏に研究協力をお願いしてきた。第三期（2014-2016年度）事業においても、同様の体制での取り組みを継続した。

#### ○各年度の研究・調査経過

第3巻の編纂の見通しが付いた2010年度（第一期の3年目）の夏には、残り4巻と5巻の編纂準備に入り、まず分量が多い本文の英語訳を若手研究者が着手した。その結果、第三期事業終了までにそれぞれの翻訳が行われた。第4巻については、ポチャラリ、君康道により、第3巻までの編集経験にもとづく研究班の本格的な検討がほぼ完了したが、第5巻についての英語版監修、および両巻の中国語、韓国語への翻訳が未了となっている。

#### ○成果の公開状況等

上記のような研究・調査経過にあることから、第4巻、第5巻の編集刊行に関しては、本文編を先行して刊行することとし、語彙編の編集刊行に関しては、第四期以降に繰り延べされることとなった。

#### (4) 研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

〈図像〉資料研究は、本センターの研究事業の柱の一つとして位置づけられ、生活絵引の編纂（図像から情報を引き出す絵引という方法）により、その方式の世界的な可能性を追求することが、本共同研究班の役割となっている。具体的には、『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の絵引本文を英語化すること、そしてキャプションをマルチ言語版（英語、中国語、韓国語）として編纂することである。しかし、第二期事業の総括にあるとおり、日本中世という、ある文化のある時代の事物、事象を把握し、それを別の文化の脈絡のなかで理解できるように表現することは大変難しいことであり、一つ一つの事項の日本語の意味を確認し、それに対応する各言語の表現を探し出し、確定する必要がある。英語や中国語、韓国語で表現するためにも膨大な時間が費やされるであろうことは容易に想像できる。世に出ている各種言語辞（事）典の単なる適用にとどまらない歴史・民俗・絵画資料研究等の知見をふまえた成果が本編纂事業に蓄積されている。

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行の意義が、以下の諸点にあるとの位置づけは不変である（第二期事業の総括より再掲）。

第一に、絵引編纂という、日本で考えられた独創的な方式を世界に示し、世界的な規模で絵引の可能性を考えて貫くための検討材料を提供したことである。日本語としては『絵巻物による日本常民生活絵引』が刊行され、多くの研究者が座右において、それに親しみ、また恩恵を受けている。しかし、日本語を解さない研究者には、『絵巻物による日本常民生活絵引』を手にしてもその独特の方式を理解することはできないであろう。『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』を手にするこゝではじめて絵引という方式を理解できることになる。辞書編纂のために絵を描き、その絵に描いた事項や部分について単語を示すという図解方式は欧米でも古くから行われている。しかしそれらは辞書編纂のために必要な事項を新たに描いて、単語を示すものである。それに対して、絵引は過去に特定の文化のなかで描かれた絵画から特定の時代の特定の生活事象を引き出すものである。文書・記録のような文字資料から情報を獲得することは歴史研究の常識であるが、絵引は図像資料から情報を引き出すものであり、この世界に類をみない独創的な方式を世界に示すことが『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の最大の使命である。

第二には、日本中世の生活文化を、日本研究者を超えて、広く理解できるように示したことである。日本語を解する研究者であれば、『絵巻物による日本常民生活絵引』をひもとくことでそれは果たせる。しかし、日本の生活文化に興味関心があるにもかかわらず、日本語を理解できない人々には、その意味するところは全く理解できない。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』によって、はじめてそれらの人々が日本中世の生活文化を具体的に理解することができるようになる。十分に検討した結果として記されている本文とキャプションを読むことで、日本史上の事項について、日本語を知らなくても適切に理解できるようになる。

第三に、日本語と各言語が対照できるマルチ言語版を刊行したことで、生活文化に関する比較研究の材料を提供できたことである。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』に収録された日本語、英語、中国語、韓国語の対比的記載は、日本の事象を理解するための措置であるが、それぞれの言語においてそれに対応する事物を引き出すことで、言語的に対照するだけでなく、具体的な事物を対照させることができる。そのためには、言うまでもなく、それぞれの言語によるその文化を対象とした生活絵引を編纂することが必要である。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂は、世界の様々な文化についての絵引が編纂されることを期待して、その呼び水の役割を果たすものである。近い将来、東アジアの諸地域において、あるいはヨーロッパにおいて、それぞれの文化が蓄積している図像資料を対象にした絵引が編纂されることを期待したい。それが可能かどうかを編纂をとおして検討し、絵引という方式の普遍性を確認するための第一歩がこのマルチ言語版といえる。

#### (5) 今後の課題と展望（自己点検・評価）

第4巻、第5巻の編纂事業に引き続き取り組むことが課題であるが、全巻にわたり気になっていることは、そもそも英語にない事物——烏帽子、長押などの類——をどうするかということである。その都度その都度説明するのは煩雑なので、一括全巻共通の Glossary を作ることにしているが、その作業はこれからである。